

高架下の天使たち

添見奏音

目次

一	出会い	6
二	心の闇	35
三	過去	74
四	再会	107
五	新しい生活	135
六	試練	170
七	再出発	197
八	それぞれの幸せ	223
九	転機	262
十	そして	311
	あとがき	332

とある町のJRローカル線。

昼間でも薄暗い、駅の高架下通路。

駅の表と裏とを行き来するための通路だが、足早に行き交う行人の他に、壁際に座って弾き語りをする者、ラジカセの音楽に合わせて仲間とダンスの練習をする者、ただ目的もなく集まってくる者たち――。

さまざまな人たちが毎日ここにやって来ては、それぞれの時間を過ごす場所でもあった。

通勤ラッシュの時間帯も過ぎ、人の歩みが緩やかになってきた頃。

通路の一角で群れる、五、六人の若い男たちの姿があった。皆、二十歳前後に見える。昨夜も同じ場所で見かけた顔だ。家にも帰らず、ここで一夜を明かしたのだろう。

「見たかよ、あん時のヒロシのツラ」

「マジだっせえ」

「でさ、トオルのやつがさ……」

彼らは地面に座って通路の一角を陣取り、大声で他愛もない話をしながら、それぞれに思い

思いの食事をしている。通路を曲がった角のコンビニで買った物のようだ。

通行人は見向きもせず、若者たちの傍を通り過ぎていく。この通路では日常茶飯事の光景なのだろう。

彼らの一人、少し伸ばした黒髪にニット帽をかぶった青年だけが、他の仲間たちとはどこか異質な存在に見えた。すらりとした華奢な長身と、色白で繊細な顔立ちには、思わず手を貸してしまいたくなるような、頼りなげな印象があった。

青年は仲間たちの会話に加わるでもなく、紙パックの牛乳にさしたストローを口にくわえたまま、前を歩いている二人連れの小学生を虚ろな目で追っていた。

小学生の一人が、新品のゲーム機をもう一人に自慢そうに見せびらかしている。

「すごいじゃん。買ってもらったのか、それ」

「いいだろ、限定モデルだぜ」

「オレにもかしてくれよ」

「イヤだよ、お前すぐこわすだろ」

小学生の会話を聞きながら、青年の脳裏に別の声が響いていた。

——情けをかけてやったのに。

「拓深たくみ、なに見てんだよ」

仲間の一人に声をかけられて、はっと我に返る。

「別に……」

——ここでいい、もう歩くのも疲れた……。親父、おふくろ、遺書も残さない親不孝な俺を許してくれ。

やがて来栖はうつろな意識のまま、機械じかけのように自分が締めていたネクタイをほどくと、木の枝に引っ掛けて輪を作りはじめた。そして、完成した輪を両手で握りしめ、ゆつくりと頭を近づける。

その時、

「死ぬのか？」

驚いた来栖は、反射的に後ろを振り向いた。

砂場を隔てて、一人の青年がじつとこちらを見ている。拓深だ。

「どうぞ、べつに止めねえし」

青年はそこに立ったまま、来栖の行動を見届けようとしているかのようだった。

来栖はネクタイを握り、振り返った格好のまま、ぴくりとも動かない。いや、動けない。

「何があったか知らないけど、死んで終わらせるなんて悔しくないのかよ」

青年の言葉が、頭の線を一本繋いだ。

確かにそうだ、なぜ俺が死ななきゃならないんだ。無性に悔しさがこみ上げてきた。こんなに容易く、人生を終わらせようとした自分の浅はかさが、たまらなく嫌になった。俺はなんて打たれ弱い人間なのか……。

涙があふれそうになるのを必死でこらえた。ここで泣いたら、もっと惨めな気持ちになる。来栖はうつむいたまま、木にくくりつけたネクタイをはずした。そして大きく吸い込んだ息を吐き出してから、もう一度ゆっくりと後ろを振り向いた。青年はまだ、そこに立っていた。「なんか腹減ったな……。君も何か食べないか？ 俺がおごるよ」
今、死のうとしていた俺が空腹を感じ、見ず知らずの人間を食事に誘っている。生きてるんだな、俺は……。

駅の高架下通路の壁にもたれて、来栖と拓深が並んで座っていた。

来栖は角のコンビニで買ったおにぎりを、味も分からなげに口に運んでいる。拓深はペットボトルのコーラを飲んでいる。

来栖は食べながら、自殺を図るに至った経緯を話した。

拓深はまるで関心のなさそうな顔で、黙って最後まで聞いていた。

「あいつにも俺と同じ思いを味わわせてやりたいよ。あいつのネクタイを木に縛りつけて、そこに首をねじ込んでやりたい！」

思いがけず大きな声が出たと、自分でも驚く来栖。

「よかったな、元気出たじゃねえか」

来栖の顔をちらりと見て、拓深はいたずらっぽく微笑んだ。
その笑顔に来栖は一瞬、目を奪われた。

「拓深」

その声にはつと振り返ると、そこには泗馬が立っていて、心配そうに拓深の顔を覗き込んでいた。

「あんた……」

思わず立ち上がる拓深。

「さつき警察が来て騒いでただろ。そんな時お前を見かけてな」

「ずっとここにいたのか」

「お前のことが、ちよつと気になってな」

拓深は嫌悪感もあらわに、

「聞いてたのか、刑事とのやりとりを」

「いや、偶然だったんだ。悪く思わないでくれ」

拓深は泗馬を無視して商店街のほうへ歩きだした。泗馬もあとを追った。

「待てよ、お前、顔色悪いぞ。さつきの刑事と何があったんだ」

「うるせえな、いちいち詮索すんなよ」

拓深の足が速くなる。泗馬も速度を合わせた。

「待てたら。なんでそんなふうに人を遠ざけようとするんだ」

「人なんか信用できねえ」

追いついた泗馬が拓深の腕をつかむ。

「俺のことも信用できないっていうのか？」

拓深はその腕を乱暴に振り払い、

「あんたが俺の味方だって、なんで分かるんだ」

追いつめられたような目で泗馬を睨みつける拓深。ただならぬその様子に、泗馬は思わず言葉を飲み込んだ。

その瞬間、拓深は駅に向かって走りだした。

「おい、拓深！」

泗馬は追いかけるのをやめ、その背中を見送った。

拓深は高架下通路まで走ってくると、ふらふらと壁に寄りかかり、崩れるようにそこに倒れ込んだ。

「誰か……助けてくれよ………」

そして目を閉じると、深い眠りに落ちていった。

*

拓深が目を覚ました時、目の前に座ってこちらを見ている泗馬の姿が、ぼんやりと視界に浮かんだ。体がひどくだるい。

「まあ色々あつてな。結局、二人ともあそこの高架下で朝を迎えたってわけだ」

「酒馬は駅の高架下通路の方向に顎をしゃくつた。」

「あそこで？」

「野宿は何度も経験してるが、あそこは風通しも良くて、なかなかの場所だったぜ」

「気楽な人だな。なあ、旅の話聞かせてくれよ」

「旅の話？」

「来栖は座りなおして、

「出会った時から、凄く興味があつたんだ。旅をして生活するのってどんな感じなのかとか、

どんなことを経験してきたのかとか」

「こういう人間に出会ったのは初めてか？」

「酒馬は苦笑しながら、

「まあ、誰でも他人の生き方には憧れるもんだけどな。俺のは別に、人に聞かせるようないい

話もねえけどよ」

「来栖は、この男なら笑つたりせぜずに、どんな話も黙って聞いてくれるだろうと思つた。ほんの少し勇気を出せば、きっと何かが変わるはずと信じ、来栖は胸の内を吐き出した。」

「俺、今の自分に迷ってるんだ。今だけじゃない、俺はずっと後悔ばかりの人生を選んできてしまった。このままじゃいけないと思つていても、簡単に自分を変えることなんてできない。充酬の話聞けば、何かヒントが見つかるかもしれないと思つたんだ」

来栖の告白に、じつと耳を傾けていた泗馬は、

「そうか。だがな、人の生き方を真似しようと思っても、決してうまくはいかないぜ」

「それは分かっているよ。でも、自分一人じゃ答えが見つけれないんだ」

来栖の思いつめた一言に、泗馬は反応した。

「「答え」って何なんだ？ 人生に答えなんてあるわけないじゃねえか。そんなふうに見えるから、迷ったり後悔したりするんじゃないかねえのか？ 足し算みたいに答えにたどり着く人生なら楽なんだろうけどな。答えのないもんを探していくのが、生きるってことなんだよ。きつとな」

そして泗馬は前を向くと、ぼんやりと景色を視界に映しながら、

「何を選んで後も悔なんかするな。後悔したって、戻ってこねえもんもあるんだからよ……」

泗馬の言葉が重く心にのしかかった。この人は、俺などが想像もできないような過酷な人生を歩んできたのかもしれない。そしてそれは、他人が不用意に触れてはならないものなのかもしれない——。来栖は心の中で、漠然とそんなことを考えていた。

砂場にいた拓深がベンチに戻ってきた。

「おう拓深、仔犬はどうした」

泗馬が訊いた。

「どっか走っていったよ」

「嫌われちまったな」

「うるせえ」